

声中にはじめのころ

初代校長 山本松市

芦屋中学校の創業を担当するようになると、当時の森本学務部長から内命をうけたのは、昭和十五年二月上旬のことであると記憶する。新設とはいいながら、芦屋中学校は、場所柄といい、規模の大きさといい、かなり経験を積んだ練達の人が初代校長に任命されるだろうとの噂が専らであった矢先なので、自分がこの大任を引きうけることは、非常な光栄であると同時に、背負い切れないほどの重責であることを痛感した。

当時、阪神間有数の高級住宅地として発展して来た精道村は、人口五万余を有し、紀元二千六百年を期して、これまでの通称をそのままに芦屋市として市制を布こうとの議が熟していたので、この土地に県立の中学校を開設することは、市制施行への条件を整える役割を果たす意味もあったに違いないが、この土地の一般の人々の直接的関心は、何といってもその頃喧しく論議されていた、中学校への入学難緩和ということであらうと思う。事実、その当時、地元で県立の中学校をもたない精道村並びに隣接町村出身の進学希望子弟は、西は、遠く神戸市内の県立一、二、三中あたりへ、東は、はるばる大阪の北野中学までも通学しなければならぬ状態であったのだから、大精道村としては、中学校設立の計画はむしろおそきに失したともいえる程であった。村当局から、県への申出は、新設に関する一切の臨時費は全額地元で負担するから、ぜひ県立学校として設置してほしいということであった。具体的には、校舎並びに備品の建設整備資金として、百万円を寄附する外に、学校敷地をも地元において購入提供するという条件であったと記憶する。そして、敷地に関しては、学校開設直後芦屋天神の裏手、貯水池上の地所約三万坪が、中学校の予定地として現実に用意されたのであったが、これは、引続いての内外の情勢の推移に影響されて、遂に実現不能に陥ったことは残念なことであった。

開校当初の仮校舎としては、最初から、岩園小学校の鉄筋校舎の一部を使用することに予定されており、事実、ここを使って開校して、爾後二年間、そのまま岩園小学校で授業を続けたのであったが、岩園に在る間は、まだ最初の予定地に校舎を建設する希望を捨てた程には情勢も急迫せず、従って、幾度か当時の生徒を予定校地に連れて上ったこともあったので、その頃の生徒には、今もってその記憶が残っている者もあらうと思う。自分としても、何とかして一日も早く、堂々たる芦屋中学校の校舎を建築したいと希望して、機会ある毎に、県の係の人達とも相談し、校地についても、二段に整地したがよいか、それとも三段でなければ無理過ぎるか、また校舎の位置、教室の配置等に至るまで何度か図を引き直して、今から思うと、まことに夢のような理想を果てしなく追い続けたものであった。学校予定地は、六籠荘にも比すべき高燥の地ではあったけれども、前方に、芦屋天神続きの小丘が横たわっているもので、校庭から直接海を見晴らすという望みはもてなかつたが、三階建の屋上からは、果してどの程度海が見えるであろうかとは、当時しばしば話題に上ったことであつた。学校への正面通路としては、岩園小学校の西の谷沿いに自動車の通れる程度の道路を造らねばならぬ必要が認められ、このことは、市の当局でもぜひ実現させると、真剣にとり上げていられた様子であつた。総じて、その頃の芦屋市民、とりわけ市の当局や要路の人達が、芦屋中学に寄せられた理解と好意とは、今思い起しても深く感謝の念を禁じ得ないところである。

殊に、当時の大利市長、後助役、山村議長あたりにはしばしばお目にかかつて、時には、必ずしも地元の責任とはいえないような問題まで協力方を注文したものであつたが、何から何まで絶大な御支援をいただいたものであつた。もともと、それらのことも、多くはその後の社会情勢の急激な変化にわざわいされて、単に計画や話し合いをただけに止って実現は不能に陥ることを、いかんともでき難い困難な時局に当面してつたのであつた。こうした無理を押しつけての数多くの援助のうち特筆すべきことは、何といつても打出の浜の仮校舎建設であつた。もともと仮校舎としての岩園小学校使用は一年間か一年半、おそくとも三年目には新校舎に移るといのが学校発足当初の計画であつた。しかし、本建築に対して希望のもてたのは、始めの暫くの間だけで、第二年を迎えないうちに、すでに本校舎建築に対する見直しは、ひどく悲観的になつていた。それかといつて、いつまでも岩園小学校にそのまま居すわることには許されない情勢にあつた。当時、岩園小学校は今田校長をはじめ職員一同極めて協力的で、中学校側の注文に対して少しの嫌な顔色も見せず、十二分の譲歩と好意を示してくれていたので、自分としては、むしろ気の毒でたまらぬという気持一杯で、何等不満をいざくこともなく感謝しながら毎日を通していたのではあつたが、しかし、精神的の協力だけで処理できることには、おのずから限度があつて、このまま推移すれば、悪くすると、小学校、中学校共倒れの危険をすら予想される状態に立ち至つていた。開校当初は、数からいつても、わ

すか二百五十名、それも小学生とさして違わない生徒で始めた小さな世帯の中学校であったものも、二年目になると、数は一挙に倍加して五百名となり、生徒の柄も見違えるように大きくなった。それはかなり教科的にも、特別の設備のある教室がなくてはその日が過せなくなって来た。岩園小学校には、いくらか教室にゆとりがあるというので、中学校が割り込んだわけではあったが、それもせいぜい一年間だけのことで、二年目にはその無理が著し過ぎて眼にあまるようになって来た。二年目になると、小学校では、木造校舎二階の畳敷の部屋を、常時児童の使う部屋に改造しなければならなかった。鉄筋一階の北隅にある、光線不足のため郷土室と名づけて物置同様になっていた部屋も、教室に使わなければならないことになって模様替えされた。特に理科室の如きは、中学校側の急速な進出のため、小学校側の使用時間に大中の制限を加えなくてはならないという、余儀ない結果を招来し、第三者から見たら、招かれざる客の横暴が眼にあまるという感を、あるいは、懐かれたかも知れない状態となり、なまじ、正面切って抗議をうけないだけに、それだけ、自分としては、気のひける思いをしなければならぬ破目に陥っていた。せっかく、勢込んで出発した声屋中学校ではあったけれども、このままでは住むに家なき風来坊に等しく、健全な発展など、とても期待できない窮境に当面してしまつたわけで、これが打開策を講じることが当面の最緊要事となって来たのであったが、この時、この難局を打開してくれたものが、実に、声屋市の新設小学校舎建設という英断なのであった。声屋市では、将来に備えて、更に小学校一校を増設する計画は前々から熟していた。そして、そのための敷地も打出の浜近く準備されてはいた。けれども、これは、いずれそのうちには必要であろうというだけのことで、寸刻を争うという性質のものではなかった。加うるに、時局の影響をうけて、建築にも制限が強くなり、資材の面から、公共建物といえども、その建築許可を得ることは容易でなくなつて来ていた。こうした情勢下にあつて、事实上は不急の建物である新設小学校（第五小学校と仮称していた）の校舎を、県立中学校の仮校舎として使用するために建築しようというのであるから、中学校後援に余程の熱意をもつてなければ、到底、実現を期することは不可能といつてよい難事業なのであった。この困難な仕事も、幸にして、県当局の十分な了解と支援の下に、関係者の誠意に貫かれて順調に進捗し、声屋中学校としては、当初期待した鉄筋校舎とは比較にならないとしても、とにかく、独立の校地校舎を与えられて、ここに漸く、独り立ちの世帯を張る緊張と幸福とを併せ味わうことができるようになったわけであった。見方によつては、これらのことは、あるいは開校当初という範囲を越えた事柄かとも考へるけれども、開校以来いづらか声屋中学校が中

学校らしい形態を整えるに至るまでの経緯の一端として、あえてここに披露するわけは、発足当初、この声屋中学校をはぐくみ育てるために与えられた、地元の温かい庇護と恵みとがいかに重大な役割を演じたものであるかを今の人達にも知ってもらい、報謝の微意を表することは、むしろ自分の義務であると、今以て強く感じているからにほかならない。

その他にも、新しく創り出すための想い出というべきものは、尽きないのであるが、就中、教員組織については、当時の片山視学官の配慮に負うところが極めて大であったことを銘記している。即ち片山視学官の口添えによつて、神戸の一、二、三中からどの教員を抜いても差支えないことに話をつけてもらったのであった。しかし、現実には、若い人達二、三をもらつたに過ぎなかつたが、これは、一つには、新設学校の組織の特異性を考へに入れて、最上級の五年生ができる頃を目途として、特に若い人達のみを集める方針を立てたためでもあった。

教育方針を定めるに当つては、まず質素と剛健とを採り上げた。これには、漠然と土地柄ということが最も考慮の中心となつたのではあったが、現実的には、生徒の日頃の持ち物や服装について、この地方の小学校をかつて見て廻つた時の感じが強く裏付けをしていたと思う。世間が、声屋の学校は、坊っちゃん学校になるだろうというふうに考へているのに抗して意識的にやぼつたい学校にしてやろうという気持も動いていたかと思う。しかし、素直な明朗な青年に仕立てなくてはならぬという考へは常に頭を去らなかつた。更に、節度ある青年に育て上げるためには、訓育を最も重視しなくてはならないと強く感じていた。そして、自分にかく決心させるには、入学考査結果の発表が予想外に後れた夜の受験生の態度、並びに入学式後教科書購入の際の生徒の混乱状態が、直接的動機となつたと記憶している。

健康の保持、増進も重点の一つであった。そして、この方面では、かなりきびしく鍛錬的方策を考へ、かつ生徒に強要した面もあつたと反省しているが、初期の生徒達は、よく積極的にこの学校の方針に共鳴の態度を持続してくれたと信じ、今も深く感謝しているところである。寒中でもシャツ一枚に半ズボンという声中生の陽に焼けた姿は、いささか世間の注目をひくものであり、また自分にとつても、終生脳裏を去ることのない深い感銘的存在であつた。

最後に、あの頃の生徒達は、初期の生徒こそ、その学校の祖先として歴史の一員を飾るべきものであり、その学校の将来を規制する重大な任務を負うものであるとの自覚と自負とを、けなげにも双肩に荷ない、歯を喰いしばって努力を怠らなかつたものであることを、心榮しく想い起しながら、常に、時代とともに歩み、いよいよ発展の一路をたどつてやまない学校の将来を祝福して、筆を擱きたいと思う。